

中学・高校の野球部における外部指導者が選手に与える影響

スポーツマネジメントゼミナール 1313061 村山 学

1. 研究動機・研究目的

高校野球の監督には2通りがある。1つは野球部指導だけを任された外部指導者である職業監督で、もう1つは教員監督である。教員監督とは部活動顧問として野球部を指導する教員のことである。美山（2010）によれば、統計上では教員監督の方が多いが、甲子園常連校になると、職業監督の割合が多くなる。

また、教育の一環として行われている野球部活動において、中学校および高校の野球部の外部指導者の登用が選手自身の競技力向上、あるいはそれ以外の要素にどのような影響をもたらしているのか。また、選手自身が望む指導者はどのような立場の指導者なのかを明らかにした研究は見当たらない。本研究では、教員監督と職業監督が選手に与える影響の違いを明らかにすること、選手が外部指導者に技術指導以外に何を求めているのかを明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

1. 調査対象者：事前調査としてJ大学野球部員（n=35）、本調査としてI県の公立中学校3校の野球部員（n=35）、I県の公立高校3校の野球部員（n=59）を対象とした。
2. 調査期間：事前調査を2016年5月11日から2016年5月18日までの8日間、本調査を2016年6月22日から2016年9月26日までの約3ヶ月間実施した。
3. 調査方法：質問紙によるアンケート調査
4. 質問項目：個人的属性、運動部活動における目的（30項目）、指導者の関わり方（54項目）、指導者に身に付けてほしい能力

3. 主な結果と考察

運動部活動の目的では、第1因子「他者からの承認」においては、顧問教員と外部指導者両方から指導を受けている選手のほうが、顧問教員から指導を受けている選手より、有意差が認められたうえで高い値を示したので、顧問教員と外部指導者両方による部活動指導のほうが、顧問教員による部活動指導より目的を達成することができているといえる。第2因子「運動による心身への効果」においては、有意差は見られなかったことから、選手の目的達成に関して、指導者の種類は関係ないといえる。第3因子「競技的成功」においては、顧問教員と外部指導者両方から指導を受けている選手のほうが、外部指導者から指導を受けている選手よりも有意差が認められたうえで高い値を示したので、顧問教員と外部指導者両方による運動部活動指導のほうが、外部指導者による運動部活動指導より目的を達成できているといえる。第4因子「運動の目的」においては、有意差は見られなか

ったことから、選手の目的達成に関して、指導者の種類は関係ないといえる。第5因子「運動への没頭」においては、顧問教員と外部指導者両方から指導を受けている選手のほうが、外部指導者から指導を受けている選手より有意差が認められたうえで高い値を示したことから、顧問教員と外部指導者両方から指導を受けている選手のほうが、外部指導者による運動部活動指導より目的を達成できているといえる。

指導者の関わりでは、第1因子「コーチング・スキル」においては、顧問教員から指導を受けている選手と外部指導者から指導を受けている選手との間で有意差が認められる傾向が見られ、外部指導者から指導を受けている選手のほうが、顧問教員から指導を受けている選手より高い値を示したことから、外部指導者のほうが顧問教員より豊富な知識、高い指導技術を持って選手と関わっていることがわかった。第2因子「選手と指導者の信頼関係」においては、有意差は見られなかったことから、優しく、選手とのコミュニケーションをとりながら選手と関わることなどといった指導者と選手の関わり方については指導者の種類によって違いはないといえる。第3因子「選手同士への働きかけ」においては、有意差は見られなかったことから、選手同士が意見し合える環境、選手同士がサポートし合う環境を作るなどといった指導者と選手の関わり方については指導者の種類によって違いはないといえる。

4. 結論

顧問教員から指導を受けている選手は、運動部活動における目的、指導者の関わり方それぞれの因子において、有意差が認められ、高い値を示した因子はなかった。外部指導者から指導を受けている選手は、運動部活動における目的において、運動部活動における目的では、有意差が認められ、高い値を示した因子はなかったが、指導者の関わり方において、「コーチング・スキル」で有意差が認められる傾向が見られ、高い値を示したので、外部指導者が豊富な知識、高い指導技術を持ち、選手と関わっていることがわかった。さらに、運動部活動における目的の「他者からの承認」「競技的成功」「運動への没頭」で顧問教員と外部指導者両方から指導を受けた選手が有意差が認められたうえで高い値を示したことから、顧問教員と外部指導者が一体となり指導することがこれらの目的達成において有益であることがわかった。結論として、顧問教員と外部指導者がそれぞれの特徴を生かし、それぞれの不足している部分を補い合いながら指導することで、選手が理想とする指導者像に近づくのではないかと考えた。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究を進めるにあたり、親身になってご指導していただいた小笠原悦子教授、ともに切磋琢磨しながら研究に取り組んできたゼミ員に心から感謝します。また、アンケートに協力していただいた指導者、部員の方々にはお礼を申し上げたいと思います。論文の執筆において、これまでにない経験ができたので、今後にも生かしたいと思います。